

星野天知宛一葉書簡考

山根賢吉

先日、宝塚市の伊和志津神社の宮司野木良郎氏の所蔵しておられる星野天知宛の一葉書簡を見る機会を得た。それは縦約十六・二センチ、横約七〇・五センチほどのもので、すでに表装されている。その全文は次の通りである。

いつも御ふやくそく

おはつかしく候

此やうな短文

御申わけ

のはしにもたらねと

よしなに御見ゆるし

願上候

再びみる間のなくて

消したらけの原稿

なほ落たる字も多

かるへく候まゝ

御見つく

ろひ恥をはかくさせ

給へ御埋め合せは

来月

致すべく候

かしこ

なつ

はしの様

御もとに

きのふは

うれしく

降つもる雪の中より

うめの花

み出し時の

こゝちこそすれ

俗物とわらひ給ふな家

のうちさへあたゝかに

相成申候

御礼は猶はるなかに

かしこ

「きのふはうれしく」以下の部分は追伸と言うべきかとも考えられるが、それ以前の部分と比較してみると、紙質及び墨色を異にしており、しかも同一の手紙とすれば「かしこ」がくり返されているのもおかしい。とすれば、これは二通の手紙をつなぎ合せたものと見える。

この二通の手紙は、旧『一葉全集』（筑摩書房刊）の「第六巻 書簡」には収められていないが、その後刊行された『近代文学鑑賞講座』（角川書店刊）の「樋口一葉」（昭和33年刊）の中に、「一葉と『文学界』」と題した勝本清一郎氏の文章があり、その中で紹介されている（『一葉と『文学界』』は、『近代文学ノート 2』（一九七九年 みすず書房刊）の中にも収められている）。

勝本氏は「私の手許に」ある「未発表資料」として、先ず「きのふはうれしく云々」の手紙について、

封筒はない。また日付、署名、宛名の部分も切り取ってある。巻紙ののりが離れてその部分が失われたのではなく、缺で切ったあとがはっきりしている。

と記され、一葉日記の一八九四年（明治27年）の二月二十六日の条に「星野君来訪、文学界十四号原稿持参」とあるところから、

二月二十七日の発信と見てよく合う。もしそうと見てよいなら、この手紙は二月末発行の「文学界」第十四号に載った「花ごもり」の稿料を天知がとどけに来たのに対する礼状である。

と述べておられる。

また、「いつも御ふやくそく云々」の手紙には封筒があり、そこには

〔封筒表〕 日ほん橋本町〇丁目十一番地 星野椋 五月十

六日 〔消印〕 武蔵東京小石川 廿九年五月十六日へ便

〔封筒裏〕 まる山福山町四番地 樋口夏

とあると記された後、

本文と封筒とを一緒の時のものとすると、この手紙は一八九六年五月十六日、随筆「あきあはせ」を「うらわか草」に寄せた際のものである。「此やうな短文」というのにそれは当る。

と述べられ、更に、

しかし「あきあはせ」は前年の秋、読売新聞の月臨附録に二回に出した四篇の小文に、新たに前がきをつけ、「そぞろごと」とあつた総題を改題して再発表したものである。新聞から消書しただけの原稿なら「消しだらけの原稿」はおかしい。しかし一葉は最後まで何か小説をあらたに書きおろす努力をして、それが遂にできず、咄嗟に旧作で間に合わせることにしたため、手許にあつた下書きの、または控えに取つてあつた「消しだらけの原稿」を転用したのであろう。

と推測しておられるが、「再びみる間のなくて消しだらけの原稿」という文章から受ける印象は、既発表のものを再掲するというよりは、新作と見なすのが妥当ではないかということである。そこで勝本氏は、もう一つの場合を想定されている。

手紙の本文と封筒とを同時のものでないと疑う場合には、「たけくらべ」のその十一とその十二の原稿を送つた第五次送稿の場合だけが問題になる。すなわち前出（筆者注・星野夕影宛書簡）の一八九五年十一月二十一日の封筒にその原稿とともにこの短い手紙がはいつていたものと解するのである。この場合には封筒と本文とこれも私の手許にある原稿の筆跡の墨色が、ともに薄墨なのでよく一致する。

「たけくらべ」の「文学界」本文の「十一」「十二」の原稿には一葉の原稿としては珍しく消しが十字ある。さらに原稿の現状では振りがなを消している墨線が九十五か所もある。この墨線を私は従来、編集者によるものと解していたのであるが、一葉自身によるものと見直して見る必要があるかも知れない。原稿紙の枚数も九枚だけである。短文だとも短文でないとも言える分量だが、質からいふといかに一葉が謙遜したとしても、かりにも「たけくらべ」の一部分を「御申わけのほしにもたらねど」とまで考えたかど

うか。やはり小説ができなくて隨筆を、それも旧作に前かきを新たに付ただけで送る場合のうしろめたさを見た方が自然である。

と、一旦、「たけくらべ」(十一)(十二)の原稿を送った場合を想定されながらも、やはり隨筆「あきあはせ」を送った場合と見る方が自然だとされている。

ところで、野木氏所蔵の一葉書簡には次の封筒が添付されている。

〔封筒表〕 日本ばし本町四丁目十一番地 星野椋 十一月廿一日 〔消印〕 武蔵東京小石川 廿八年十一月未便

〔封筒裏〕 本郷丸山福山町四番地 樋口なつ

これは、勝本氏によれば、星野夕影宛書簡の入っていたもので、「たけくらべ」(十一)(十二)を送った時のものであるとされている。しかしその夕影宛書簡中には「二十一日までのこといかゞや 御こたへにくるしみ候 おゆるし下され度 かけさへ致し候はゞその頃までに御手もとへかならずさし出すべく候へども」という一節があり、これが十一月二十一日の「たけくらべ」(十一)(十二)送稿時に同封されていたとは到底考えられないのである。そこで勝本氏は、

その数日まえに二十一日といふ切日の切迫におびえつ

夕影にとりなしを頼んだ内容のものである。

とされ、「この本文と封筒とは一緒のものではないという疑問」も起ると記しておられる。

私見によれば、この封筒は、先に勝本氏が「いつも御ふやくそく云々」の手紙について想定された第二の場合、すなわち「手紙本文と封筒を同時のものではないと疑う場合」として推定された「たけくらべ」第五次送稿時の封筒と考えるのが妥当ではないかということである。当然のことながらこの封筒に「たけくらべ」(十一)(十二)とともに同封されていたのは、夕影宛の書簡ではなくて、「いつも御ふやくそく云々」の書簡である。勝本氏は「短文」ということになりにこだわられたようであるが、第五次送稿の(十一)(十二)は、それまでのものに比して、たしかに「短文」である。第一次送稿から第五次送稿分までの「文学界」発表の「たけくらべ」の行数(いずれも一行は二七字)を見ると次の通りである。

第一次「文学界」25号	(一) 62行	(二) 78行	(三) 計22行
第二次「文学界」26号	(四) 62行	(五) 73行	(六) 計29行
第三次「文学界」27号	(七) 71行	(八) 77行	計

18行

第四次「文学界」32号 (九) 81行 (十) 74行 計

15行

第五次「文学界」35号 (十一) 64行 (十二) 56行

計10行

第一次と第二次はそれぞれ三章分発表しているのだから、合計した行数の多いのは当然のことながら、第三次、第四次の各二章分よりも第五次はすくなく、これまでの最低である。従って作者がこれを「短文」と意識したとしても、あながち不自然とは言えないであろう。

「消しだらけの原稿」については、勝本氏の言われるように、「だけくらべ」(十一)(十二)の原稿には消しが十字あり、さらにルビを消している墨線が九十五か所ある点をあげることができ、一葉が「消しだらけ」と言ったのは主として「十字」ほどの消し字について言ったもので、九十五か所のルビを墨線で消したのは、やはり編集者と見るべきであろう。と言うのは、「だけくらべ」(十一)(十二)は「文学界」第三十五号の冒頭に掲載されているのだが、その最後の部分が四頁上段になっている。ルビを墨線で消してあるのは大部分この四頁上段の部分である。これは、三頁まで二段組十八行どりであったの

を、四頁になって二段組二一行どりに変更したために、行間をつめる必要上起ったものだからである。

『一葉に与へた手紙』(昭和18年刊)によれば、天知は二十八年十一月二十日附で一葉に次の手紙を出している。

編輯の爲め田舎より帰り候所机上いまだ御貴稿を見ず大に懸念に堪へず候ま、筆を走らして御願ひ申上候落葉の候もの淋しく今月の誌上はまことに爾条の色相見へ申候間先月よりの御約束をたのしみに罷在候今はもし貴稿の参らずもあらば実以て遺憾に御座候編者の苦痛万々御察しの事とは存候へ共尚偏へに願入る事に御座候ことがだけくらべもとの御助け願上候也

十一月二十日

天知

一葉さま

この天知の督促によって、ある程度まで書いていた「だけくらべ」第五次分を急遽まとめざるを得なくなった一葉は、「消しだらけ」の「短文」を送らざるを得なかったのではないか。先に述べた通り「いつも御ふやくそく云々」の天知宛書簡はその原稿に同封されていたものと思われる。すでに勝本氏が言われているように、「だけくらべ」第五次分原稿と、この手紙と、二十八年十一月二十一日付の封筒の筆跡とは墨色がよく一致し

ていることも、右の事実を裏づけているであらう。

こうして、天知の要請にこたえた一葉の「たけくらべ」(十一)(十二)は、先に述べたように、「文学界」第三十五号の冒頭に掲載された。連載ものの中間部分を冒頭に置くことは、「文学界」として極めて稀なことであつて、そこに天知の一葉に対する感謝の意が読みとれるのである。

しかし、一葉にとつては忽卒の間に成つた「消しだらけ」の「短文」だったわけで、何とかしてこれを補正しようと考えたのではないか。すでに先学によつて指摘されているように、「たけくらべ」の(十二)と(十三)とが内容的にダブつているところがある。そこには一葉が(十二)を(十三)で補正しようとする意識も働いていたからではないだろうか。

以上、野木氏所蔵の天知宛一葉書簡二通についてふれたが、もう一通天理図書館蔵の明治二十九年六月二十八日附書簡がある。これはすでに今西実氏が「泉介一葉の天知宛て書簡」(『山辺道』第十四号 昭和43年7月)で詳細に紹介されている。今西氏の言われる通り、この一葉書簡は「天知より疎音を謝し、『文学界』に投稿を促したものに對する返信であると思われる」のだが、文中に「文学界の御ことおほせは なければとも此月はく」とひとりおもひつゝ、例のおそうしのこと なし

にくつくと日を暮し」とか「親類の病人などにて 日々こ、かしこきまよひ居候折から」とかの部分は、勝本氏が紹介された夕影宛書簡中の「先月も申わけなき事に相成居候まゝ此月だにとはこゝろがけ居しに候へども御存じのやみ牛たゞのろく」と日をくらし候て たゞ今こゝにのれがたき用事などもわき出で居り候」に近い表現が目につく。「たけくらべ」完結後、「あきあはせ」を除けば、「文学界」に送稿したことのない一葉に「文学界」側としては何度か送稿をうながしたに相違ない。右の二通の一葉書簡は、それに対する一種の釈明とも見られるように思われる。勝本氏が「いつも御ふやくそく云々」の封筒としてあげられた二十九年五月十六日附の封筒は、内容・表現・日付などから見ても、夕影宛の手紙の封筒と考えた方がふさわしいように思われる。晩年の勝本氏はあるいはそういうお考えで、「いつも御ふやくそく云々」の手紙には二十八年十一月二十一日附の封筒を添付して手離されたのではなからうか。夕影宛書簡がどこにあるのかは私にはわからないが、それには二十九年五月十六日附の封筒が添付されているのではなからうか。

本稿をなすにあたり野木良郎氏の御好意を得たことはもちろん、野口碩氏・今西実氏・宮嶋一郎氏から種々ご教示なら

びにご配慮を得たことに対して厚く御礼を申し上げる。野木氏が神宮皇学館に在学中「古語拾遺」を講じられた若き助手が現在の守屋教授であったとは、つい最近野木氏よりうかがった話で、人の世のえにしの不思議さをつくづく考えさせられたことである。